

おばあさんうさぎのこと

松井 とし

幼稚園で仕事をするようになった時、園には白いうさぎがいたが、無表情にただモクモクとキャベツを食べ続ける、少し汚れたそのうさぎを私は愛せなかった。

木製の小さな小屋を園庭のまん中に引き出し、ホースで洗う時には、ストローブを囲う金網で仮の居場所を作り、うさぎをそこへ移した。土の上に置かれると、遠慮がちに自分の周りをピョンピョンと回ったり、前足で土を掘ったりして、うさぎは小屋の中にいる時とは違ってみえた。そんなある日、せめてうさぎらしく運動させてやれないものかと思い、金網を少し持ち上げ四角い金網の先端をつぼめると、とたんにうさぎは遮二無二走り出した。腰に金網をあてて、逃げないように地上から二〇センチ位の高さを保ったまま持ち上げ、私も必死に走った。金網を下ろすと、うさぎは静かにすわった。満足げなそのようすを見ていて、何だかうれしくなった。それからはこの奇妙な二足四脚が習慣となり、いつのまにか私はうさぎに話しかけ、うさぎをかわいいと感じるようになっていた。それで

も、放してしまうことには不安があり、放し飼いに踏み切れないまま時が過ぎた。

夏休み中の日直のある日、うさぎは金網の縁を掘り続け、ついに金網の外へ出てしまった。初めて、うさぎの能動的な強い意志を感じ、「そんなにしたいのなら……」と、心を決めた。近所を徘徊する猫たちの存在が気になったが、後ろ足をピッピッと蹴り上げて走ったり、クローバーを食べたり、木陰で足を投げ出してくつろぐ姿は本当に生き生きしていた。

ところが洗った小屋が乾き、夕方になっても一向に小屋へ入る気配はなく、段々不安になってきた。仕方なく放したまま野菜を買いに出かけ、八百屋のおじさんに話すと「大丈夫、うさぎは帰巢本能があるから」と言ってくれた。新鮮な野菜を小屋の中へ置き、うさぎの後ろから声をかけながら追っていくが、なかなか小屋には入ろうとしない。ようやくゆっくりと小屋のまわりを一周して入口の前までくると、うさぎは後ろにいる私を振り返った。そして前足を入口にかけて中を覗くと、一気にビヨンと中へ入った。私は思わず「ありがとう」と言った。あたりは夕闇が迫り、静かだった。

うさぎが振り向いた瞬間、私にはうさぎが笑ったように思えた。「心がふれあった」という思いはその後の多くのうさぎたちとの信頼にみちた日々の原点となり、今も私の心に深く刻まれている。

(元幼稚園教諭)